

研究通信

No. 18

1955年12月刊

研究会
社会部
村落編集

丁平片市台
教育大学
内室研究部
東北学

知識を全体のものに

(東京) 有賀喜左エ門

今度の大会も前二回の大会と同じように参会者の心持がとけ合つて何ともいれない気持ちの良い雰囲気であつたのはうれしい。こうして今思い出してもそのあと味というか、ほとほりというか、それが心の中に消えないで残つて、もう三回も重ねて来たのだから、これが村研の伝統となり、そんな気がする。

研究発表の形式や時間はあれで良かったのである。どの人も沢山発表したいことをみな残して終つてゐる。どうしたらもつと充分に話して貰えるだろうか。一つの研究発表が終つたあとの質疑応答があまりできないことは他の会合と少しもちがつてゐないことは残念だし、この点をもう少し変えて行きたいものだ。あとの討論会は討論会で面白いのだが、個々の研究者の立場や考え方がその時に充分に出るとは云われないから、研究発表についてもつと話し合つて行かなければやはり物足りない。

討論会の方は雰囲気さえ良ければ当然うまく行くのだと思ふ。その点で今年は前二回のそれより良かったし、進歩したと思ふ。小池君や並木君がリードしてくれたことも有る。こころを、歴史や社会学の関係の人ももつと

話を出して良かったと思ふ。井森君が出した村の共同生活の面で人手がどんな風に入用であるかという問題は、個々の家の経営や経済とちがつた角度で考えられる人口問題として見て良いと思ふが、話の調子で全然話題として発散しなかつたのは惜しかつたと思ふ。大体家の経営や経営における人口の問題に主題を引きさらつて行つてしまつたのは、従来その方面が主となつてゐるからである。そして今年の共同課題の出し方も農村家族の構造が主になつてゐたからだ。だからこの問題を追求したのも当然とはいひ得る。村研のあり方としてはマクロな問題を背景にしてミクロなアプローチをしようとしてゐるのであるから、一応農村家族から出発したが、これらは当然村落全体の問題につながるのだから、村落の人口問題という点に關係づけなければならぬ。裕がなくなつたのは残念であるが、もつと整理してもらつて、もう一度出して頂くことを希望してゐる。

テーマの成文化ができてから再検討したいと思ふが、今年度の研究や討論においては人口の影響を家族構造において見出すのに充分でなかつたことが確認されてゐる。しかしこの問題は容易でないことを感ずる。家の問題はわかつたようだが、まだわからない点も随分多い。我々が接するところの出来た個々の農家の入達の人生観にしても、日本の歴史を背景として形造られて来て、今日の家庭生活を深く動かしてゐるのだから、経済構造や社会構造を深く考へてしまふと、その深みに我々の眼光を到達させる事もできなくなつてしまふということ、我々は最もおそれなければならぬ。村研はそれぞれの人の専門科学の知識を、その専門に捉われずに我々全体のものにすることに目標をおきた

☆
☆
☆

豊富な事実にもとづく

厳正な検証を

(東京) R.P.ドーア

非常に活潑な面白い討論でした。大分勉強にもなりましたし、それより重要なことは色々考えさせられたという刺激的な効果がありました。今度の討論会に現われた問題点を整理して、来年はそれを中心に討論を進めるといふ方法は非常にいいと思います。その整理の仕方は色々ありましようが、一つの試案として次のようなことを提案したいと思ひます。まず問題を大別すると、大卒次の三点になるのではないかと思います。

一 理論の問題

理論の問題——というより用語の定義の問題——を一番さきに片付ける必要があると思ひます。例えば、「過剰人口」という言葉。今度の討論会では「労働予備軍」として日本資本主義が必要としたもの」といふ「目的論的」な定義を前提としたような発言もありました。が、大体において「ある地域における土地利用及び雇傭機会から得られる所得を一人当りで割つて、各人が一定の生活水準に達し得る場合の頭数を適度人口と見なし、それ以上の人口を過剰人口とする」と言つたような潜在的な定義を頭に設けている人の方が多かつたように思ひます。しかしそこで問題になるのは、その「一定の生活水準」の一定をどう決

めるかという事ですが、社会学者が「健康的で文化的な生活」を営む事が出来る水準を外から定めて持つて来るが(例えば米価審議会が生産費の計算に使つた一定の労働評価のよう)、それとも「その地域の人が予期している水準」(あるいは普通とされている水準、達し得なければ不足を感じる水準)と言つたようなとりえ方をするか、それによつて大きく違つて来ます。前者の方が簡單で、全国的に一律に適用出来るという利点はありますが、それを現実とどこでつなぎあわせることが出来るかという問題を残すし、そういう分析から出た結論は果してどういふ意味を持つているか明かではない。もし「社会問題」としての人口問題——社会的不安、人間的な Frustration をもたらすものとしての過剰人口——が問題とされているならば、後者の方の定義を取つた方が有利だと思ひます。なぜなら、その不安 Frustration の原因は、予期された水準と現実の水準との間のひらきにあるからです。(尤も不安 Frustration を感ぜずには外から見てどうも低いと思われる水準にあまんじている人の場合、問題)がなるとするのは間違つてゐる。よつて外から、予期すべき生活水準を決める必要があるという主張もなり立ちますが……)

後者の方の定義を取るとすれば、過剰人口の量の計算に、すでに経済学者が社会学者の援助を得るか、自分で社会学的経済学者になるかしなければならぬと思ひます。地方々々に依つて普通とされている、或は予期されている生活水準が違ふか、どういふ条件によつて規定されているか、都市の過剰、平均経営規模の広狭、貧富の差の度合等とどういふ關係を示すか。色々問題が出て来ます。しかしいづれにしても大切なのは「過剰人口」等の定義を明かにして固定させて置いて、Aが前者のつもりで話し、Bが後者のつもりで答へ、そこから喰違ひが生じると言つた事を避ける事だと思ひます。(ついでですが討論会の時に出て来た一つの疑問——すなわち「どうして明治時代にはこの村にこれだけの人口がいて現在より技術の水準が低かつたのに人口が過剰とされていなくて現在になつて過剰とされて来ているか」といふ疑問は、こういう用に定義を明かにすることによつて解決されるのではないかと思ひます。つまり予期されている生活水準が向上したといふことの現われとして把握出来ます。)

二 事実の問題

まだ事實についてデータの足りない面も大分出て来たように思ひます。長男の離村が戦後ふえたか、次三男の離村が戦後減つたか等もつとデータがなければいくら論じても解決を見ない問題を、なるべく細かく系統的に具体的に列記する事。

三 因果關係についての問題

多くの問題点はこの部類に入ると思ひますが、今後の討論の場合、時々喰違ひを生じた事の一つとして、次次の事を指摘したい。つまり「XがYの原因であつた」といふ主張の

場合、それが「一つの原因であつた」という意味か、「唯一の原因であつた」という意味か、「一番有効な原因であつた」という意味か、必ずしもハッキリしなかつたと思ひます。例へば長男の難村が少かつたのは、或は一家を挙げての難村が少かつたのは、「低賃銀と食料生産」との結果とする考え方と、「家にしづられていたため」との見方と、両方とも「一つの原因」という意味で主張されているならば云うまでもなく対立はありません。

しかしおそらくそこで問題になつて来る。「たゞXよりもY」という要因の方が重要（或は有力、根本的、中心的）なものである」というような表現です。この「重要」といつた言葉の意味をもう少し検討する必要がありますと思ひます。

例へば長男が家を出て都会の工員になりました。その家は土地が少くて生活が苦しかつた。またその家は親の代から村へ入つた家で「家」としての伝統があまり盛くなかつた。またその長男は父と折合がよくなかつた。この人の場合、は経済的な要因、「家」の觀念がうすかつたという要因、感情的な要因の中でどれが重要であつたというような問題の出し方はあまり意味がないと思ひます。意味がないというのは、こういう一つの事例に於て動機の相対的な強さを測る道具を社会学者が持合はせていないからです。「重要な要因」という事を有義的に言えるのは、多くの例を量的に分析する場合だけだと思ひます。例へば長男の難村の事例が千人あつたとすれば、その中で経済的な要因が見出されるのが七百人で、

感情的な要因が見出されるのが三百人といつた場合、前者の方が重要な要因といふのは意味があると思ひます。（尤も必要條件と充分條件と言つたような分析もありえますが、これも「実験の繰返し」が許されていない社会科学の場合はどうしても多くの事例の比較に依らなければならぬ。）

どうも初歩的な方法論の「お説教」みたいなになりましたが、そもその結論としては問題点の整理に當つて、まず討論に出て来た因果關係についての種々な意見や仮説の中で、対立的と思われるものがあつた場合、果して対立しているかどうかを理論的に検討する事、その二の段階としては対立している仮説を並べて論じて、どういふような調査によるどういふような事実の蒐集によつて、片方を取り片方を捨てる結論が出るかという風に調査の設計をやる、という事が必要ではないかと思ひます。

どうせ来れば「居ない奴」だからこそ、こう理想論がはけると皆さんが思ひになるでしょうが……。（ロンドン大学講師・現住東京都新宿区戸塚町二丁目志水方）

充全の準備を

（福岡） 喜多野清一

大阪での討論会の司会は大失敗でした。もう少し筋立つた整理、方向づけができねばならないし、またもつといるるな方からの発言をも求めさるべきでした。テープコーダーが整理されたら問題の所在もなお明らかになる

ことでしよう。疲勞過剰ということもありませんが、才一の原因は勉強不足です。今になつては仕様のないことですが、書庫にわび致します。村研の大会は何と言つても課題について勉強して来るのでなければいけません。ということは何と解つていながら、私の側では従来決してそうは行つていない。色々非難がましいことはやめにして、次回には是非実行しなければならぬなどと、無りの事づくづく思い省したことでした。しかし準備でした。公会堂での懇親会もなつかしく思出しています。一切の御苦勞を背負つて下さつた大阪の諸兄にもあつく感謝します。さて大阪は地方の連絡委員もできたことですから、肝煎つて貰つて、漢達の方でも地方の研究会も実行したいと思つていきます。

一つの提案

（東京） 福武 直

今年の才三回大会の最も大きい収穫は、討論がこれまでにくらべて集中的に行われたことであつたと思ふ。そして、それが半年後にまで延長されたことも当然であつたと考えられる。しかし、前の二回にくらべてよかつたというだけで、安心はできない。討論の内容をふりかえつてみると、会員の全部の参加をみるまでに至らなかつたことが十分に指摘される。報告の質疑のようなりとりは時間にとられたことも否定できない。また、討論す

「オーストラリアの題目が、あらかじら検討されなかつたことも反省されなければならぬ。そして、時間が短かつたといううらみもある。こう考えてくると、できれば、二日をさいて、才一日の報告後の討論で、才二日に討議すべき問題を決定し、整理を行つた上で、翌日十分な時間をかけて、なるべく多数の意見が出るように、その結果何らかの問題の解決点に到達できるようにしたいと思ふ。これは無理な注文であろうか。二日が無理だとすれば、来年は本年のつすきであるから、二人くらの専門研究者に、問題を整理してもらつて報告をうけ、それも要旨をプリントにして会員に配布しておく。それを基礎にして、大会の時間の大部分を討議にあてられないものであるか。もちろん、この問題点は、なるべく広い視点から、またいろいろな角度から指摘されていることが望ましい。そうすれば、参加者の多数が討論に参加できるからである。

なお、二日の会期が無理なばあひ、もうひとつ考へるべきことは、**「本年の報告を早く」**に読まれたのちに大会がもたれるように努力することである。来年度のテーマが同じなのだから、とくにそうしたい。このばあひ、「年報才四集」をどうするかということが問題になるが、一度くらいは比較的ひろく投稿できるような趣のもとに大会とは離れて原稿を集めたいのである。

以上、大会をより活潑にするための一試案である。会員諸氏の積極的な御意見をききた

大阪大会以後

(福岡) 原 宏

小雨降る大阪の大会は最近に得た機会の中で最も親身に感じ、多くを教えられた秀れたものでした。研究会とでもいうべき、ブカデミックなしかもサロン風な、いうなればツンケンらしい雰囲気と言つてもよいでしょう。帰つて直ちに筆をとつてみた所、どうも村研礼讃に終りそうになつて、一寸腰が折れていました。そこに鋭い矢が飛んで来ました。「君のテール・スピーチはだんだん辛ラツさを失つて、何か村研礼讃に近くなりました。これはあぶないです」という戒めがしたゝめてありました。返子なる有賀先生からです。思はず脳天に一発喰つた所です。戒めは更に又ルピンでなく、涼安がもつと出ることを祈ります」という結びにまで続けられております。村研を愛する前にムラを愛さねばならぬということを考へます。有賀先生のお言葉を私は次のように解釈させて貰つています。即ち、私自身の身についた、盛く根を下した研究を進めること、日本にもメルピン以上の秀れた研究者が出ることで、村研には後者と思つてを銘記すべきであつて、村研には後者と思つています。リンドストロム氏、ドーア氏達の出席を得たことも大きな収穫でしょう。特にドーア氏と、中央公会堂に行く道すがら、英國農家のことを話しあつたが、氏との僅かな対

話の中に多くの示唆をうけたことは、能好の機会でした。

さて村研の運営については、自由発表方式は村研の大会が一日だけに限られてゐる現状では無理だと思ひます。せめて二日あれば一日か半日は自由発表に廻けると思ひます。又共同討議には今後ともテール・レコーダーを利用して頂きたいと思ひます。次期大会は東京ですが、歴史学や地理学の分野の方も多く出席されるよう、せいせい御勧誘下さるよう、せめて在東京の斯学の人に働きかけて頂けたらと思ひます。

来年度の課題については、一応従前の線が決りましたが、大いに賛成です。研究通信の体裁は現状でいゝと思ひます。

大変勝手なことを述べましたが、只今大阪で報告したのをまとめていきます。その傍ら (A Bennett life on the English Manor) を読んでいますが、大変勉強になります。皆さんのお便りを期待してきます。

地方だより

◎ 仙台より

今年も東北各地へは他地方からいくつも現地調査団が入りこんできたようである。東北大学の各研究室でもそれぞれに現地研究がとりはこばれているが、なるべく一定のテーマを追求しての確率的な調査研究をおこなおうというのが、近年の傾向といつてよい。いわば「お祭」みたいな一回こつぎりの現地調査でなく、研究室での完全の共同討議と確率的な現地観察とを積重ねぬ

第三回大会記事

日 時 昭和三十年十月十八日
場 所 大阪市毎日新聞社大阪本社講堂

講 題 「農家人口の変動と家族の構造」

朗読の辞 (東京教育大) 有賀馨左衛門
撰 多 (毎日新聞社) 上沼 健吉

【研究報告】

農家人口の構造と兼業

(福岡筑紫高) 源 法

別荘山村の農家人口 (大阪市大) 中島龍太郎

農産生産力と兼業人口 (慶大) 小池 基之

農家の人口移動と家 (農業経済) 並木 正吉

【共同討議】

(司会) 喜多野清一 福武 直

【講演と懇談】

大阪市中央公会堂食堂

十月十八日、上記のように大阪市毎日新聞社大講堂において、我々の第三回大会が行われた。大阪大学甲田氏、大阪市立大学山本氏はじめ地元諸氏の前々よりの御厚刀により、ことに交々毎日新聞大阪本社論説委員上原健吉氏の行きとどいた御協力を受け、有意義に大会を終えることができた。

集った会員は五十名ほどで、決して多いとは言えなかつたが、我々が例年持つことのできたのの対峙らしい研究共同の雰囲気は充分

発揮された。源宏・中島龍太郎・小池基之・並木正吉の諸氏よりの充実した報告後、会場を別の会場に変え、喜多野・福武両氏前会のもとに活潑な共同討議に移つた。これはテープ・コーダーで録音、目下その原稿化を大阪市立大山本氏のもとで担当されている。近く本通信に掲載できるはずである。

懇親会・懇談会は、大阪市中央公会堂地下食堂に移された。大敗らしい夕陽の西照の空気を染しみながら、その会場に入ると、甲田氏らの特別の取方による講究スタイルが用意されていて、大いに歓迎し、討議を促す方針については、次のような決定を見た。

- (1) 別荘山村のように、年度は事務局・研究連絡編集委員会、現大坂市に移すこと。当夕出席の上下、討議形式より承諾あり。
- (2) 年報討議事務局のみは、事務局との連絡上、従来通り東京でかゝらう。
- (3) 東京には東京支部を置く。その連絡係は東大福武直氏、北海道支部には北大の関根吉氏、関西支部には大阪大の甲田氏、西南支部には内藤龍彦氏にそれぞれ、お願いする。
- (4) 来年大会の共同テーマは、今年の研究人口の課題を更に追究することとする。但し、よりくわしくは更に村落通信紙上で論議し、宿題委員会によつて例年のようにまとめてゆく。
- (5) 宿題委員には今届までの委員に継続委嘱すると共に、小池基之氏に加わつていただく。(新事務局委員の参加は前例のとおり)
- (6) 来年の第四回大会は東京とし、日本社会

1007

※ つつ、問題の核心に迫らうとするのである。事務局が移されたのを機会に、各研究室間の話し合いの場を作り、それだけの研究成果の交換や調査方法の検討などをしてみたいと、寄り寄り打合せ中である。何となく討議支部といった形で、定例の研究・懇談会によつて行きたいと思願している。次に主な現地調査研究を紹介しておく。

△ 近世村落共同体の形成、経済学部中村(吉)研究室。すでに今年にわたる共同研究も、よりよく今年で一応のまとまりがつけられ、近く、その報告書が刊行される。

△ 共有林野と村落の問題。(経済学部下(研究室) 斎藤、若手県下の各地の調査。
△ 町町合併と地域社会の変動について、(文学部社会学研究室) 白石市を中心に現地調査。

△ 三陸沿岸における漁業の発達と村落構造の変動(教育学部教育社会学研究室) 仕藤平島、氣津沼、喜喜来済を調査。札幌半島の三半間の調査結果は近くまとまる。
△ 奥羽山村の社会変動(同上)、松玉山麓の調査。
△ 東北農村の社会慣行(文学部各研究室共同) 相馬、会津地方を中心とする調査を終了。(才一平慶)
△ 東北民家の調査(農学部生活社会学研究室) 仙台近郊について。
△ 学会大会の前々日に開催する。以上の如くであつた。(中野車)

基礎概念への志向を

(仙台) 矢木明夫

今年は大台にも出席できなかったもので、せめてその罪滅しにもと一筆させていたゞく。もつとも、希焰をあげて罪は一層重くなるかもしれない。私は村研の異端が多方面の研究者の結果にあると考えているので、そうした方向への前進をめざして、経済史専攻者としての意見をのべてみよう。

最近の歴史学研究上の大きな特色の一つは、共同体についての関心が著しく高まつてきたことである。一時的にみて、こうした傾向は従来になかったことであり、以前は法制や経済に比して「社会構造」の研究の必要が、歴史学の中で重要な地位を占めていなかったといえよう。

しかし特に先資本主義社会の諸問題の考察において、共同体が程度の差こそあれ、重要なものとして基礎に据えられなければならないことはいうまでもない。そうした点では歴史研究上の立廻れがむしろ不思議であつたと考えられるかもしれない。ともかく今日の共同体への関心の増大は喜ばしいことである。

ところがまた一步その関心なるものの内容に立入ると、そう手ばなしで喜んでいいものではない。というのは「村落構造」という題名の志大な研究には、農氏の土地所有規模別構成かせいぜい葬祭関係位しかでてこないのである。つまり昔の「社会史」即ち、階級史乃至

は「農家史」といつた態度をでていないのである。いやこれでは階級の特権意識すら明かになる筈はない。私もふくめて、こうした眼界を反省し突破するために、共同体の基礎理論に歴史家は眼を向けはじめている。西洋経済史家の側からも「共同体の基礎理論」の経理がはじまつている。こうした所から出発すれば抽象的な「経済外強制」論や封建主義の基本法則も一層明白となる。

そうなつてくると、我々は何にもまして従来専ら「社会構造」、少くも社会学的概念や理論の探究に当つてこられた社会学者の方達にこうした問題について御教示を乞ひたいのである。共同体とは、村落とは、家族とは、いかなる基礎において成立しその本質や変化の様相はどのようなものであるのか。こうした概念をもつと意識的に取上げて多くの調査

農氏の社会的態度の研究が、村落構造の研究と共にだんだん行われるようになってきたが、態度測定の方法の検討の方に私はおもに刀をいれている次第です。近頃よく紹介されている潜在構造分析も実際に使いますと大変うまく予想通り行くときもありますが、Cross Productの値がマイナスになつたり latent Marginals of Items が1以上あるのはマイナスになつたりして色々研究して行く必要が多く生じます。それと共に数値

調査技術の検討

(和歌山) 西田春彦

の中で検証し破えあげていたゞきたい。こうした社会学独自の概念・理論に社会学プロパ一の特質を求めておられる御意見を本誌前号で拜見し、一方で心強く思うと共に社会学者の調査に余りにもこうした基礎前提への配慮が少いようにみえるのは素人のひがみなのかとも考えている。例えば我が國の農民運動の問題にしても、それが農業経済学会などで取上げられるのではなくして、村研でとりあげられる場合に「村落構造」という概念が社会学者の報告したようなもの程度にとどめておいてよいものかどうか、こうした点について社会学者の感性的な理論的・実証で報えられた——批判こそが望ましいと思うのである。素外隣接諸科学における「社会構造」監視乃至は無視の原因がこの辺にあつたのではないかとひねくれてもみたくなるのである。

に対する社会学的解釈の下し方にも検討が必要で、こうした資料についての情報の交換が望まれます。Cross Product がマイナスの時、解については池田一貞氏が「和歌山大学社会学部記要」(来春刊行予定)に発表するはずで、現在はこうした資料をも得るため和歌山県下で中小学校教員に標本抽出で調査をしています。こうした調査技術の検討について諸方面からいろいろ情報をいたゞければ幸と思つていきます。

資料と分析と実践と

(仙台) 菅野俊作

有賀先生から、研究通信に何か村研に対する注文でも書けというのですが、こうして「大家」業は私には出来そうもないので、日頃から調査報告などまとめる時にいつも直面する幼稚な問題を書いて、村研の方々から御教示をいただき度いと思ひます。

この幼稚な問題というのは、例の「農地改革願末撰製」の作製にあつて、特殊小作慣行地帯のうち、木下彰教授が分担された、名子制度地帯の調査に参加したとき以来のものです。調査は岩手県九仁部大館村晴山家の名子制度を中心として行われたが、実はかつて封建論争の華かな頃、山田盛太郎、土屋雄の阿氏の間でかわされた名子論争は、まさにこの晴山家の名子制度を対象としたものであつた訳です。両氏共新聞や口述をよりどころとしたのであるが、山田氏は、日本農村分析の礎石としてこの名子制度を取り上げ、専ら労働地帯の面から典型的な農奴形を構成するものと規定し「分析」したのに対して、土屋氏は早速、典型的な名子制度なるものと紹介されつつ、同家の場合は主として債務関係を媒介とした成立事情や、賦役の代納の可能性からむしろその崩壊過程に属するものとして歴史的に位置づけた(「史論集」)のであつた。調査結果は「名子制度と農地改革」(農政調査会刊)に詳しいが、資料を整理し

てみると一方成程山田氏の如き中世的性格は根強く残つてゐるし、また他方土屋氏の指摘された点もまさに首肯出来るのであつた。そこで、いづれか一方の立論基礎に立つて、意識的に他の側面に関する資料を棄てるとすれば、相互に立証するに足る資料は充分すぎる程抽出出来る性質のものであつた。しかし問題はそこで終る筈はなからず、問題はこの両側面を構造的に全体として、どう規定するかという点にあると思はれる。然し両氏共、再版では殆んど書き改めていない所をみると、別に書き改める必要もない程構造的な把握をこそ書いたのであると思はれる。山田氏がこんどの調査地に晴山家を固執した一斑の理由もわかるような気がする。

さて、同一の資料を拠り所として、かくも併行的な二つの理論がいまも残存するということは一体何故だるうかという疑問は私だけのものだらうか。
また、「発達」では同じゼムストヴオ統計を利用しながら、一方のナロードニキの停滞理論と、他方のレーニンの発展理論が全く対蹠的に展開されていることは周知の事実である。そして前者が誤りであつたことは歴史が、實踐が、良くこれを証明していることも確かである。しかし私の知りたいことはレーニンの出発点とその際意識的に切り棄てた統計資料である。と同様にそれが「農業綱領」とどうつながつてゐるかというのである。調査と分析と實踐とをどう統一すべきであるか。どうしたことが、どの調査でも報告に

苦勞する問題である。

「ヴ・ナロード」という意識と、戦略戦術の転換に対応の急なあまり、準備作業の積重ねや、討論を抜きにした報告が少なくない今日、「愉快なる心境」から鋭い批判を加えている方がある。取上げられた事実に疎い私には、その点に関する限り何ともいえないが、若し仮に事実に歪曲がないとすれば、読書新聞才八一六号(三〇、九、二六日)に市原亮平氏が、「戦後の社会科学で一部のいわゆる進歩的理論の配置ほど転変さだまりがたい分野はないのである」と述べておられるのも当然だと考えさせられた。

なお晴山家の名子制度については、矢木明夫氏が、「グロツヘル経営」として一応把握しておられる(村研・年報才一集)が、私も一九世紀末ロシアの「雇役的地主経営」と考へてはどうかと提案した(村研才一回大会)のであつたが、この点も改めて御教授いたされれば幸いと存じます。

告知板

※ 年報「才二集」発刊
「農地改革と農民運動」
時潮社 刊
A5版二四四頁
定価三〇〇円
(内容)
大内 刀
福武 直
松原 治郎
部落構造と農民運動
部落の「平和」と階級的緊張
農業先進地における農民運動と

C10111

「共進村」における農地改革と農民運動
名子制度と農地改革
生田 清

給与者同盟会の成立とその条件
後藤 和夫

農民運動に関する主要な文献と資料
神谷 力

農民組合の系譜図について
内山 政昭

向 (一九五四、七、五五、六)
松原 治郎

村落史の研究
中村 吉治

経済学における村落研究
小池 基之

法学における村落研究
渡辺 洋三

社会学における村落研究
内藤 莞爾

社会経済的地位尺度 (Socio-Economic Status Scale) の試み
西田 春彦

◆ 本委員会とその紹介者は
「二五〇円」に特別割引

本会才一年度の研究課題「農地改革の村落社会に及ぼした影響」と才二年度課題「農地改革と農民運動」についての諸報告を精選して一冊としたもの。農地改革に関する多数の論著中、農民運動との連関において問題をとりあげたものとしはあそらく類書を見ないきわめて異色の業績と称すべきでしょう。附載の文献資料目録、農民組合系譜図も、また有益です。なお、巻末に過去一ケ年の村落研究の動向を、歴史学、経済学、法学、社会学の各分野別に展覧した適切な論評が附されています。会員の方々はもちろん、ひろく同好の人々におすすぬ願います。会員およびその紹介者には、特に「二割引」「二五〇円」でお頒ちできますから、「時潮社」宛に御申込頂きたい。さらにできるだけ、各研究室でとりまとめ、御さばき下されば幸甚です。(この場合も割引は同様)。なお年報の売上げが、本会の運営を左右することになるので、その

点を充分御考えの上、同平よりしく各位の御尽力を御願いたします。

◆ 共同課題への提案を
大会記事でごらんのように、来年度も共同課題として「農家人口と家族構造」の問題を継続して検討することにきまりました。どうぞ、それについて「具体的な提案」をどしどし御出下さい。とくに大会に御出になれなかつた方々の御意見をうかがいたいと存じます。問題を含めたいものにして、完全の準備をもつて次の大会にのりたいたいというのが大阪大会の協議会での結論でもありました。

「研究通信」への投稿を期待しています。

◆ 事務局 (研究通信発行所) の移転について
十一月から、本会の事務局、研究通信発行所を左記へ移しました。今後、会の連絡や研究通信への投稿などは、新事務局宛にねがいます。但し、振替貯金口座(東京一三二八八六番)は従来通り東京に残してありますので、会費の納入その他送金関係は、旧事務局(東京教育大又は東大の東京支部)宛にねがいます。なお、年報編集事務局は、東京支部で従前どおり扱います。

(新事務局)
仙台市片平丁 東北大学教育学部研究室内(竹内利美氏附)

村落社会研究会事務局
「事務局、研究通信発行所は会員の所属する各大学研究室の輪番担当とする」という本会会則の附則にもとずき、才三回大会における総会で、事務局を仙台市東北大学門に移すことになりました。大体一年交代で今後も会務を各地方支部単位で分担してゆくことをこの際再確認したいと存じます。

◆ 会費の払込について
三十年度の会費未納の方は早急に払込み下さい。(三百円)。会費はなるべく各支部で便宜とりまとめ、御払込下されば幸です。(振替口座をなるべく御利用下さい)。

◆ 三十年度会費納入者(十月末現在)
(あ) 大橋薫 奥田和彦 井森達平 飯島源次郎 安藤慶一郎 有賀喜左衛門 生田清 栗谷清次 後藤和夫 甲田和衛 小山隆 小池基之 神谷刀 木下彰 諏訪園岩雄

(か) 高野史男 竹内利美
(き) 西田春彦 中島龍太郎 南清彦
(け) 蓮見音彦 原宏 林福苗 福武直 服部治則
(こ) 森正夫 森岡清美 マクナイト
(こ) 米林富男 山岡栄市 山本登 山田敬道

◆ 新しい会員名簿の頒布
新しい会員名簿ができました。大会参加者には御頒けしましたが、他の方々にもできるだけ利用して頂きたく、御申込下さい。(実費送料とも三十円、切手代用で結構です)

(追いがき)
新事務局版の才一号をようやく御届けする段取になり、まず一息。不十分だらけと存じますが、何卒遠慮のない御忠言をおねがいします。ドーア氏を先着に続々御寄稿がありおかげさまで形がつき安しました。
(竹)

(タイプ印刷) 仙台市北材木町 135 才一孔版社 電話(2)三三三二